

予 定 ・ 自 由 ・ 法 則

山 中 良 知

1

聖書の予定論についてのカルヴィン主義的教説が近代社会発足の端初に社会倫理的役割を果たしたという論題については、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」とか、トニーの「宗教と資本主義の興隆」を初め、すでに古典的テーマとなった事柄である。

無論その論考については賛否両論であって歴史的・実証的にも、或は、聖書の教理から見ても、予定論から流れ出てくる近代社会の理念の問題が決着を見たものとは思われないが、いずれにしても、カルヴィン主義予定論が、宗教改革以後のプロテスタント社会成員の重要な職業倫理を提供したことは、顕著なことである。これが資本主義社会の精神への橋渡しとなったか否かは、いま触れるべき問題でない。一般文化の領域における予定信仰の役割もさることながら、問題を中心にもどして教会員の福音伝道の活潑さが、人間の自由意志に強調点をおく自由主義的教会よりも、救いにおける神の予定を告白する教会の方に多く見られることは著しいことである。神の予定は、宿命ではなくして、人間に高次の自由を新生せしめるものであれば¹⁾ そのような、神と人に仕える高次の自由²⁾ に自己の生涯を具体化せしめるほどに至らない自由固執の立場と予定信仰とは、相互対立の関係にある。無論この場合の予定信仰とは、選びと亡びの二重予定を内容とするものであって、カルヴィニズムにおいては、一重予定説のことを意味しない。たといまた普遍救助的な予定説が、考えらるるにしても、カルヴィニズムの歴史的伝統的教理

とは相い入れないものである。

註1) マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神」の中で、何故に予定信仰から活潑な自由な勤労観が生まれるかを説明するときに、社会倫理的観点から無理からぬことであるが、心理的、行為的な面をみて、新生実存の内的構造からの論究を見おとしている。

さて、予定論が教会活動の領域或は人文研究、社会科学の対象領域における意義は、すでに歴史的任務を或る程度果たしたといっても宜い。たとえば、福音伝道とか職業倫理などは、自己が神に選ばれているという予定信仰の主体化と自己確信の場所であった。選ばれる原因は、自己のうちになく、神のうちであり、神的意志の原因は再び神自身に帰せねばならないが、神の予定は、現実のおのが身の上に具体化されているかどうかということの確さを求める熱心さは、予定を神の意志の御計画にふさわしく、絶対的なものとする信仰の量に正比例する。前述の如く、予定は、こちらの側においては、主体の自由の高次の昇華であるので、救いの確さは、神に仕える熱心さに再び正比例するものと考えられる。自然の生来的自由から、自由を自由にもちいる自由の乗躰への媒介点として予定信仰が、キリスト教徒の人格形成と社会活動の支柱となっていたことは、近代ヨーロッパの社会形成の考究には、欠くべからざる要因であった。

さて次に見るべき問題として自然科学の対象である自然理解に対して、プロテスタントの予定信仰が科学興隆の当初においてどの様な背景的役割を果たしたかということはマックス・ウェーバーなどの説く、社会倫理の事柄に劣らず重要なものである。自然科学の研究とその成果が近代ヨーロッ

が社会形成の要因として考えられる場合に、予定信仰に立つ人格活動と、自然科学的思考とが近代社会の端初において二律背反的關係にあるとは、考えられない。近代的学問の代表的位置にまで昇った自然科学が、これもまたヨーロッパ社会の精神的支柱であるキリスト教信仰と相い矛盾するということは、考えられない。歴史的現実をはなれて両者を抽象的思考の操作によって対立的に考えるには余りにもヨーロッパ社会は、その統一性に立っている。若し社会が文化的統一を欠いた非社会的性格をもつ場合は、歴史の過渡期における社会の非連続的状况の場合以外は考えられないし、また世界史の主役を演じた近代のヨーロッパ社会においては、それは不可能といわざるを得ない。さらに問題を蓋然的な考え方から、中心にもどして自然科学の根本原理が、プロテスタント教国を支えた予定信仰と若し矛盾した関係におかれるならば、新教国は当時恐らくかくも積極的な意向を自然科学の研究とその成果の利用に示さなかったのではあるまいか。これはこれからの問題をすすめるための前提となる事柄である。

そこでいま歴史的背景にまつわる問題からはなれて端的に予定論が、自然科学的決定論と交流しうる原理的位置についてのありうべき条件を見なければならぬ¹⁾。この場合の自然科学的決定論を、科学の対象として自然を理解可能なものとする条件として、自然法則性をうけとめて、科学的自然解釈に法則の概念の不可避的必要を前提とした上で、予定論との関係を問題にしなければならぬ。不確定性原理が、認識主観の相対性を理由に、認識の対象に蓋然的性質を附与するとはいえ、なお自然の秩序ある因果法則を前提としなければ、自然認識の可能性は成立しない。

註1) A. Lecerf: ÉTUDES CALVINISTES, 1949 中の De l'impulsion donnée par le calvinisme à l'étude des sciences physiques et naturelles (1937) の項で、当時の科学者の科学研究の態度に対して、カルヴァンがそれに使命的意味をあたえたことをのべている。

2

近代自然科学の対象としての自然は、それ自体完結性をもつものとして理解される点では、ギリシャにおける汎自然主義的な自然観に類似する点もあるが、しかし、その場合ノモスの対立概念としてのフィシスのような自然ではなく、むしろ法則性としてとらえる点、一つの抽象の世界であって、ギリシャにおける、神・人間・世界の包括的概念としての自然とはことなる。次に中世精神史の主題が「自然と恩寵」として古来より表現されているとしても、この場合の自然は、ギリシャ的なものや、近代的なものとはおよそ異り、精神のうちに内面化され乍ら、世界の秩序においては二次的な位置に貶置されたものにすぎない。それに呼応して外界に広がる自然の位置は、究極者に対する類比的的存在であって、自体的存在ではないが様態的には、超自然的力の象徴である恩寵と対立してナッターとよばれ、自生的なものと考えられている。ギリシャの自然は、中世では、二種に分離し、存在としては類比的で、機能としては自律的となり、しかも認識論的には、思弁の対象となったために、アリストテレスのシロギズムの方法がとられるに至った。ここに自然概念が中世世界観の二元論的構造の煽りをうけて、幾重にも変様し乍ら、やがてルネッサンスと宗教改革において総決算されねばならぬ運命を辿ったのである。

ところで中世につぐ近世においては、知性の抽象作用を媒介にして「存在の類比」という存在理解にひそむ自然の擬人観を捨てて、「自我の自覚」が、他者なる自然の定立を可能ならしめるという精神構造の地盤となったときに、自我確立の射程は、他者なる自然に独立的意味をあたえたので、中世より近世への著しい跳躍となったといって過言ではない。またこの場合、自我の確立の地盤は、ルネッサンスの古典趣味においてよりも、時代の進展につれて、厳しい宗教改革の精神によって育生されたのであって、具体的には、ルターの「万人祭司」の教理や、カルヴァンの「聖霊論」においては、各人が聖霊をうけている限り、夫々

各人の行為と思考に権威と責任が保証されるという精神の態度が規定されているのである。それ故、宗教改革者の発想法の原理は、神を知って、自己を知ること究極した。これはカルヴァンの基督教綱要の第1巻1章の冒頭を極めて美しく飾っている思想であるが、その極限概念としてカルヴァンにおいて、またカルヴィニズムにおいては、さらに予定信仰として表現されることによって、さらに著しい特色をあらわしたのである。実存論的な文学的表現をこえて、神を知るとは、神の意志の認識として同時に神の意志のなかに自己がどのように位置づけられるかを知ること外ならない。人間の神認識が、若し予定の教理にねざさないときは、人間の神認識に神の啓示の位置を従属せしめるというグノーシスの危険におちいり主観主義となる。神認識すらが神の予定という永遠の意志のうちの事柄であって、このような信仰は、神の啓示をあらゆる人間の認識の操作をこえたところに位置づけようとする宗教改革的敬虔である。

要するにここでは、永遠の予定という神の必然が、人間の自由の根拠であり、さらに人間の自由の自覚が、人格の確立の地盤であって、近世初頭の自然観の確立は、この様な精神的構造と纏綿する諸要素の一つであると見られる。

さて若し「人格の確立」のうちに、予定信仰という超自然的契機の自覚的前提がとり去られた場合には、カントとそれに続くドイツ観念論に現われてくる、あらゆる認識と存在の究極の原理としての「理性の自律」が提唱されるのは至極当然なことである。この場合も、理性の確立は、同時に批判主義という先験的過程を経て、自然現象の世界の可能性を条件付けるとはいえ、予定信仰におけるように、神による人格の自覚を人格確立の原理とするのではなく、そこでは理性による理性の自覚の確立が究極原理となり、そこからは人間の内面性深化の原理が提唱されてくる。この様な、理性の根拠が理性のうちに求められ、自己が自己に対する関係を規定する原理を同時に内包しつつ自己進展の地平を開くといった精神の系譜は、信仰の立場から見れば、内在主義となるのであるが、これもヨーロッパ文化を現在まで支えたいく

つかの根の一つとあってよい。しかしこれと予定信仰とは根本的に発想法を異にすると見なければならぬ。

3

さて以上のことに加えて、科学の原理がどの点において予定論と接触点をもつかという問題の第二の点は、神の予定の対象がたんに人格的なもののみではなく、世界宇宙の事物についての永遠的な決定という非人格的なものにも関係していることを理解しなければならない。非人格的なもの、非倫理的なものに対する神の決定的計画を予定と区別して、聖定 (decree) という言葉で表現すれば、聖書の理解において、中世における自然観とプロテスタントのそれとは次の点において重大な相異を示している。中世の精神構造の階位制 (Hierarchy) という具体的表現において理解される場合質料的、或は物質的事象が形相的、或は精神的事物の下位にあるというギリシャの発想法を継承しているので、自然を対象とする思考を、精神的、宗教的对象についてのそれより下位にみたことは当然である。中世の精神が近代的思考へと屈折するための歴進、移行の原理となる役割をプロテスタントの聖定論の教理が荷った場合に、或は少なくとも自然的事象への科学的思考の一つの方位決定の可能性をあたえる起動点となった場合、中世から近世の移項において聖書の世界観的展望が、所謂宗教的、倫理的地平をはるかにこえた、全宇宙的事象に拡大したのはこれまた当然である。つまりそのことは聖書の啓示における神の世界経倫的聖定についての理解として予定信仰によったものといえよう。このことは、宗教が自然の事物の探求に門戸を閉じることによって、自然についての群生した迷信を切断することにあづかって力があつた。ルネッサンスの時代に、星占学的迷信を閉じ込め、更にはアリストテレスの三段論法的思弁性を拒否して、自然についての自由な思索を可能にしたのは、プロテスタントの聖定論的信仰であったことは著しいことである。一般的に云って迷信の打開のための強力な要因は、科学的

思考であると考えられているが、その思考の起点となったものは、迷信に対立する正信の包括的世界観であって、それが科学的思考の本来前提である思弁の抽象性がたまたま誤っておちいる偏見と、科学的知識が部分的であるために全体への展望を失い、そのために生ずる科学者自身のもつ迷信をも打開するのに力をあたえたのである。

このことを、更にすすめて考えてみると、予定信仰に立つ自然理解は、認識主観に対する自然の無記的性質を主張するものではない。聖理解は主観が事物に到達するまえの事物の有意味性を根拠づける。つまりそれは自然の事物が、その意味づけを認識主観におおぐまえに、神の創造と摂理のうちに存在と、さらにその意味理解の根拠をもつことを主張する。

ところでこの場合、自然の有意味性が、中世における物活論や擬人観とは別に、自然的秩序について自然法則という非人格の概念を媒介にして根拠づけられたのは、予定信仰によるのである。自然が近代科学におけるように、法則的因果的概念によって理解され、科学は専らその法則を探求するものと考えられるに至ったのは、物活論や擬人観から決別してからのことであるが、この決別、分離の矢面に立ったのが、カルヴィン主義予定論である。無論 15・6 世紀の科学者が凡て予定信仰を自覚していた訳ではないのは当然であるので、このような歴史的な運動の原因は、案外宗教改革者の深い自覚的精神、ここで云う予定信仰のうちに求められるのであるが、予定信仰に立つ自然観のうちに、自然を対象とする科学観の確立に重要な因子と提供したと考えることは、誤りではない。要するに中世に科学の育生を拒んだものの一つは迷信であったが、その迷信が社会化されていたので、それを切除して科学の前提をつくった功積を少なく見積ることは出来ない。

4

神の予定は、具体的歴史の面において人間の自由と自然の法則という第二原因を媒介点とする。予定が、宇宙を対象としては聖定といわれる場

合、予定の固有領域は、人間の魂の再生と啓明 (illuminatio) であり、それに世界創造を加えて神の直接的支配の事柄であるとみられる。それに対して、聖定は、一般的摂理として第二原因を媒介とした人間と自然の統活、保持をふくみ、直接的領域をこえた事柄に属するものとして立てられている。この場合第二原因としての人間の自由と自然の必然的法則は、相互関係としてでなく、各々独立したものと考えられねば、自然が自由によって、又自由が自然の法則によって何らかの制限下におかれることになり、混乱をまぬがれない。ドイツ観念論、とくにカントの認識論の根幹となっている発想法は、自由の原理である理性が同時に自然認識の原理となるという強力な思想である。無論そのために、先ず自由が理性として、自己を限定し先験的原理となって、究極において自然の根拠としての自己深化を遂げるという理性の系譜は近代精神の典型とみられるとしても、聖書の立場はこれに対立する。ここでは理性が認識の原理とはならない。理性によって認識するのであるが、理性にもとずいて認識するのではない。ここに啓示、或は信仰の立場として、決して譲れないものがある。

自由と自然の法則との関係が聖定という永遠の秩序において計画されているということは、自由と自然が現実に予盾関係にない証左である。問題は、自由を制限して、自然の可能性と考えたり、或は逆であると考えすることは、現実的具体性をもたない。自由と自然の法則のいずれにも、第一原因的性質を考えることなく、夫々が現実には第二原因的存在であり乍ら、聖定の永遠の秩序において、統一をもっていることは、むしろ現実にそくした理解でもある。

さて次に聖定が世界統一的性格として自覚される場合は、「自然斉一の法則」にさらにより高い次元から根拠をあたえるものである。永遠の秩序のうちに計画された自然的秩序という思想は、自然自体のうちに成立の原理は求められず、自然を超えて自然の根拠を考えている結果、かえって自然に対しての普遍的原理の適応を理解する可能と

なる。自然の事物が、夫々孤立しないで、自然の法則があらゆるところに統一的・斉一的に自然の事物を貫通して、一つの例外もないということは、自然の原理が神の永遠的計画として聖定のうちにおかれているからである。聖定とは、このようにあらゆる事物の実現の手段と条件とをふくみ、総合的統一的な計画であるが故に、以上のような自然の斉一的法則の理解も可能となる。斉一的法則自体が、自己証明の原理とはならないからである。

このような予定信仰は、中世的自然観において、階層的に第七の天まで仕組まれている自然の領域の異質性という思想を打破し、ガリレオ、ケプレルの斉一的自然観を遠まきに援助したものとみられる。

最後にこのことに加えて、聖定の奏効性が第二原因に対する関係をのべると、「自然に奇蹟がないことが奇蹟である」といわれているように、自然の法則は、偶然性を許容せず、法則を各領域に恒常的に慣通しているものと理解されるこのことは、自然科学が成立するための前提的原理である。神の全能なる意志は、明日の太陽の軌道を、今日のそれと違ったものとするのできるという盲目的意志者の神観に立てば科学と宗教は対立する¹⁾。

神の盲目的意志という神観に立つ信仰は、自ら法則的自然を対象とする科学の立場を受け容れることが出来ないので、この場合宗教と科学とは矛盾対応の関係とならざるをえない。このように宗教と科学が対立的関係や、さらに或は妥協的二元的並列的である場合においては、本来の科学的精神は成立しない。近代科学の本流が、予定信仰を根幹にしている新教的ゲルマン系の国か、旧教的、ラテン国か、いずれの方に流れているか、歴史的に実証されねばならないことであり、端的に云うことは困難な課題であるが、一般の国民性のうちに科学的精神がいきわたっていることについては、プロテスタント・ゲルマン系の国の方に軍配があげられる。しかしこの様に断定して、歴史的結果から、原因を推定しようとする論理の脆弱性に依存するよりも、むしろここで問題としたい

のは、予定信仰が自然科学出発当初の出立ちに対して、夫々の内部において原理的に深い統一点を見出すことが出来たということであって、それが近代の科学進歩の出発点に最大の貢献をしたことを認めれば足りるのである。

註1) 予定の奏効性が自然の法則の斉一性と関係する場合に伝統的神学では神の誠実性ということとの関係においてとりあげられている。

5

さて現代我々がおちいる二つの危険は、科学主義の風靡のもとに信仰の世界の实在に目を閉じることであり、他の一つは科学と信仰を二律背反的關係におくることである。そしてさらにその危険は科学と信仰の本来の關係が信仰の立場において、タブー的に考えられる程偏狭になったり、或は誤れる敬虔主義におちいて盲目的に科学の新説を排撃するといった類である。それ故、現代科学の研究に包括的意味付けをあたえ、科学がやがてその先端において関係する技術の実践的目標に正しい方向付けをなし、しかも信仰の立場が抽象的觀念の世界に遊離することなく、科学の現実面において具体化するためにも、科学と信仰の立場の根本的原理的理解が必要である。この様な時代的課題を解決するために、矢張りもう一度、中世末期、宗教改革当時における科学と信仰の根底的切点を摘出し、具体的にそのことはプロテスタントの予定論において見られたのである。様々に考えられる中に、最も重要であって今迄余りかえりみられなかった側面を今ここに試論的に論究した訳である。しかし乍らただマックス・ウェーバーや、トレルチ等がとりあげた、プロテスタントの社会倫理が、社会的表面においてとらえられる限りにおいて実証性をもったのに対して、予定信仰が直接的に自然の法則理解を染色するのではなく、むしろ科学者の学的精神の内奥において切点を見出す様な問題の性質であったところに、今迄迎ってきた問題の困難さがあることを了解してもらえたりるのである。

参考文献

- 1) 予定論の教理的研究
John Calvin, Concerning The Eternal Pre-
deslination of God, Translated by T. K. S.
Reid.
人間の自由意志と神の予定について述べている
最も基本的文書である。
 - 2) H. Bavinck Geformeerde Dogmatick II De
Raad Gods (301r—369)
カルヴァンの予定説を組織神学のうちに位置づ
けた代表的文書である。これは W. Hendri-
ksen による英訳 The Doctrine of God の第
七章に出ている。聖書の引用が豊富であるし、
異説に対して充分な論駁がなされている。
 - 3) W. G. T. Shedd Dogmatic Theology, Chapter
VI. The Divine Decrees (393—462)
Predestination と Decree の区別を理解する
ために利益である。
 - 4) Max Weber. Die Protestantische Ethik und
der Geist des Kapitalismus
予定論の社会倫理的意味がすぐれて描出されて
いて、これは、自然科学の問題に対する予定論
の關係に類比できる程の強力な主張をもってい
る。
 - 5) Dr G. C. Berkouwer : Dogmatische Studien
- De Verkiezing Gods.
これは教理史的な研究の上に立ち乍ら、予定論
そのものよりもそれにかかわる教理上の問題を
手際よく処理している。
自然哲学の問題については上記のものよりも同
氏の同じシリーズの De Voorzienigheid Gods
(英訳 “Providence” あり) 第七章においてよ
り詳細に取扱われている。
 - 6) Thomas Aquinas: Summa theologica, ques-
tions 5~6, Providence And Predestination,
Translated by Robert W. Mulligan, A Ga-
teway Edition.
 - 7) Angustinus, De civitate Dei, V, I. ここで
アウグスチヌスの予定論が明瞭に描出されている。
つまりこの当時の宿命論、偶然論や星占術の立
場を批判して、予定論を主張している。
 - 8) 自然の因果法則的性質に関する参考書として、
Cande Bernard: Introduction à l'étude de
la médecine expérimentale. Paris, 1865.
(実験医学序説として三浦袋栄による邦訳あり、
創元文庫)
 - 9) 田辺元著、哲学と科学との間、岩波書店刊行の
中の「科学性の成立」において科学の合理性と
実証性について詳論されている。
 - 10) ボアンカレ著「科学の価値」又「科学と方法」
(岩波文庫)
 - 11) カントの三批判書。